

聖母マリアのカンティーガ (2)

—奇跡を求める中世の人々—

Las cantigas de Santa María, II,
Pueblos medievales rogando milagros

菊地章太

KIKUCHI Noritaka

要旨

カスティーリャ・レオン王国の王アルフォンソ10世は、カンティーガと呼ばれる詩歌を集成した。聖母マリアを讃えたその書物は『聖母マリア讃歌集』の名で呼ばれ、420篇におよぶ作品を収めている。抒情詩の表現にふさわしい文学言語として重んじられたガリシア＝ポルトガル語で全篇がつづられ、カンティーガのひとつひとつに曲が附されて楽譜が中世の記譜法で記してある。それぞれの場面を表した多数の挿画が写本をかざっており、いずれも13世紀イベリアの信仰と芸術を伝える貴重な遺産となっている。アルフォンソ王の宮廷にはキリスト教徒とともにイスラーム教徒やユダヤ人の詩人・音楽家が活動していた。学芸への愛好にあふれた環境のなかで、アラビア語の抒情詩やイスラーム音楽を取り入れつつ聖母のカンティーガが語り出されたのである。

本稿は『聖母マリア讃歌集』のなかから次の5つの主題を考察の対象とし、それにふさわしいカンティーガを選んで読み解いていくところみである。第1章では聖母のカンティーガがめざしたものを明らかにし、詩の韻律形式とその抒情性の源泉を探っていく（以上前号）。第2章では聖母の奇跡を語るカンティーガを取りあげ、同じ主題をあつかったヨーロッパとほかの地域の文芸作品との比較をおこなう（以上本号）。第3章では聖母マリアの聖地にちなむカンティーガを取りあげ、奇跡の起きる場の生成過程を写本挿画の描写もまじえてたどる。第4章ではアルフォンソ10世の生涯を語るカンティーガをもとに、学芸への情熱を抱きつづけた王の挫折に満ちた歩みを詩句のなかに探る。第5章では聖母の祝祭のカンティーガをカトリック神学の視点から捉え、のちのスペイン・ポルトガルでさかんに信仰された聖母の無原罪御宿りの源泉を読み取っていく。以上の考察をもとに、聖母のカンティーガに現れた13世紀イベリアの信仰と芸術の諸相を明らかにすることをめざしたい。

キーワード：聖母マリア信仰 カンティーガ ガリシア＝ポルトガル語 中世イベリア芸術 カトリック神学

第2章 聖母の奇跡のカンティエーガ

1. 聖母奇跡集成への歩み

6世紀のローマ教皇グレゴリウス1世 *sanctus Gregorius magnus* は、キリスト教史において古代の終わりと中世のはじまりを告げた人物である。神学はもとより教会典礼の形成にも偉大な足跡を残した。彼の名を負う『グレゴリウス秘跡書』*Sacramentarium Gregorianum* は実際には9世紀に編纂されたものだが、592年に教皇がみずから作らせた秘跡書がもとになっている。西欧中世における典礼の基礎を確立し、近世にいたるまで絶大な影響をあたえつづけた。同じことはグレゴリオ聖歌についても言えよう。これも現在では9世紀以降の成立と考えられているが、権威ある教皇の名と結びついて、千年以上ものあいだカトリック教会で歌いつがれてきた。

グレゴリウス教皇がペトルスという名の助祭 *Petrus diaconus* とかわした奇跡に関する問答集がある。これは教皇が直接に関与したもので、594年に4巻の『対話』*Dialogorum* にまとめられた⁽¹⁾。ここには諸聖人にまつわる奇跡の数々が示され、教訓が附されている。これが中世にさかんに作られた教訓説話 *exempla* へと発展した。さらに諸聖人の伝記すなわち聖者伝 *legenda* もおびただしく書かれるようになる。『対話』の第4巻には聖母マリアにかかわる奇跡がいくつか収められ、やがて聖母奇跡集成の編纂へとつながっていく。

つづく7世紀には聖母の奇跡物語が次々と語り出された。これは東方教会で聖母の祝日が制定されたことと連動している。8月15日が聖母の御眠り *koimēsis* の祝日とされ、のちに西方教会に伝わって、現在につづく被昇天 *assumptio* の祝日に受けつがれた。12月8日の無原罪御宿り *conceptio immaculata* の祝日は、これにやや遅れて9世紀に西方教会に導入された（無原罪聖母の教義は長い時間をかけて確定していくが、これは本稿の第5章で述べる予定である）。その信仰は西ヨーロッパの各地に広まり、とりわけイングランドで重要な展開をとげることになる。

1109年に没したカンタベリーの大司教アンセルムス *Anselmus Cantuariensis* は、マリアはあらゆる人間と同じく原罪を抱いて生まれ、御子キリストの恵みによって清められたと主張した。これに対し弟子の修道士エアドメルス *Eadmerus monachus* は、マリアが母の胎内に宿ったときすでに原罪から清められたと考え、『聖なる処女マリアの御宿りについての論考』*Tractatus de conceptione beatae Mariae virginis* を執筆した⁽²⁾。これは1124年に成立したとされ、その後の教義の形成に大きな影響をあたえた。

12世紀以降、こうした聖母信仰の高揚を背景として聖母の生涯にかかわるさまざまな伝承が生まれ、奇跡の物語が続々と書かれた。これは西欧世界における聖者伝の激増とも関連することだが、聖母伝に限っていえば、無原罪御宿りの信仰に新たな展開を示したイングランドが揺籃の地のひとつとなった⁽³⁾。中世ラテン語による聖母奇跡物語の目録によれば、その総数は1800点近くにのぼる⁽⁴⁾。これは異本は含めていないので実際の数となると想像もつかない。

ラテン語の著作について俗語による聖母の奇跡物語が書かれるようになる。1165年頃にイングランドの聖職者アドガル *Adgar* が『恩寵の書』*Le Gracial* と題してアングロ・ノルマン語による最初の集成を編纂した。これは中世フランス語の系統に属する言語で、当時のイングランドが置かれた歴史的状況を反映している。これにやや遅れてフランスの修道士ゴーティエ・ド・コワンシー *Gautier*

de Coinci が『聖母の奇跡集』 *Les miracles de Nostre Dame* を著した。イベリアでは13世紀にゴンサロ・デ・ベルセオ Gonzalo de Berceo がカスティーリャ語による『聖母の奇跡集』 *Milagros de Nuestra Señora* をまとめている。

これらの俗語集成に語られた聖母の奇跡のいくつかは、その時代に多くの巡礼を集めた各地の聖所と深い関わりをもっていた⁽⁵⁾。むしろ巡礼聖地の興隆とともに、こうした物語が語り出されたとも言える。上記のいずれの集成も『聖母マリア讃歌集』の成立にさまざまな影響をあたえ、あるいは直接の典拠を提供した。以下に聖母の奇跡のカンティーガを読みつつ、同じ主題をあつかったヨーロッパのほかの地域の俗語作品との比較をこころみたい。そのうえで13世紀イベリアにおける聖母の信仰と芸術の特質を考えたいと思う。

2. 少女ムーサの奇跡

カンティーガ第79番は少女ムーサに起きた奇跡の歌物語である。教皇グレゴリウス1世の『対話』に語られたラテン語の短い話がもとにあり、アドガルの『恩寵の書』においてアングロ・ノルマン語に移され、さらに『讃歌集』においてガリシア＝ポルトガル語でつづられた作品である。テキストと試訳を以下に示す⁽⁶⁾。

[題辞]

- 1 Como Santa Maria tornou a menia que era gar[r]ida, corda,
- 2 e levó-a sigo a Parayso.
- 1 どのようにして聖マリアが落ち着きのなかった少女に落ち着きを取り戻させ、
- 2 天国へいっしょに連れて行ったか。

[反復句]

- | | |
|-------------------------------|-----------------|
| 3 <i>Ai, Santa Maria,</i> | ああ、聖マリア、 |
| 4 <i>quem se per vos guya</i> | あなたに導かれた人は |
| 5 <i>quit' é de folia</i> | 分別をなくしても助けられ、 |
| 6 <i>e senpre faz ben.</i> | いつもすこやかな心でいられる。 |

[第1詩節]

- | | |
|--|-------------------------|
| 7 Porend' un miragre vos direi fremoso | ここにすばらしい奇跡をひとつあなた方に語ろう。 |
| 8 que fezo a Madre do Rei grorioso, | 栄光の主〔キリスト〕の母がおこなった奇跡を。 |
| 9 e de o oyr seer-vos-á saboroso, | それを聞けばあなた方はうっとりするだろう。 |
| 10 e prazer-mi-á en. | そして私までうっとりさせるだろう。 |
| 11 <i>Ai, Santa María...</i> | ああ、聖マリア…… |

[第2詩節]

- | | |
|--|-------------------|
| 12 Aquesto foi feito por hũa menynna | これはひとりの少女に起きたこと。 |
| 13 que chamavan Musa, que mui fremosinna | ムーサという名の、美しい少女。 |
| 14 era e aposta, mas garridelinna | 愛くるしく、けれど落ち着きがなく、 |
| 15 e de pouco sen. | そして考えが足りない。 |

16 *Ai, Santa María...*

[第3詩節]

17 E esto fazendo, a mui Groriosa
18 pareceu-lle en sonnos, sobejo fremosa,
19 con muitas meninnas de maravillosa
20 beldad' ; e poren
21 *Ai, Santa María...*

[第4詩節]

22 Quisera-se Musa ir con elas logo.
23 Mas Santa María lle dis[s]' : Eu te rogo
24 que, se mig' ir queres, leixes ris' e jogo,
25 orgull' e desden.
26 *Ai, Santa María...*

[第5詩節]

27 E se esto fazes, d' oj' a trinta dias
28 serás comigo entr' estas compannias
29 de moças que vees, que non son sandias,
30 ca lles non conven.
31 *Ai, Santa María...*

[第6詩節]

32 Atant' ouve Musa sabor das conpannas
33 que en vision vira, que leixou sas mannas
34 e fillou log' outras, daquelas estrannas,
35 e non quis al ren.
36 *Ai, Santa María...*

[第7詩節]

37 O padre e a madre, quand' aquesto viron,
38 preguntaron Musa : e pois que ll' oyron
39 contar o que vira, merçee pediron
40 à que nos manten.
41 *Ai, Santa María...*

[第8詩節]

42 A vint' e seis días tal fever aguda
43 fillou log' a Musa, que jouve tenduda ;
44 e Santa Maria ll' ouv' apareçuda,
45 que lle disse : Ven,
46 *Ai, Santa María...*

ああ、聖マリア……

あるとき栄光の御方が
少女の夢に現れた。すばらしく美しい
少女たちといっしょに、おどろくほどの
きれいな少女たち。なぜならそれは、
ああ、聖マリア……

ムーサが今すぐいっしょに行きたいと望むように。
だが聖マリアは少女に言った。あなたが望んで
私といっしょに行きたいのなら、笑ったりふざけたり、
高ぶったり [自分を] さげすんだりしないように。
ああ、聖マリア……

もしそのようにするなら、今日から三十日後、
あなたはなかまに囲まれて私とともにいるでしょう。
見たとおりの落ち着いたこの少女たちと。
落ち着きがないのはあなたにふさわしくないこと。
ああ、聖マリア……

夢で見た少女たちもムーサを好きになった。
ムーサは自分の [今までの] 習慣を捨て、
新しい別の習慣を身につけ、
ほかに何も望まなかった。
ああ、聖マリア……

父と母はそれを見て、
ムーサにたずねた。そして目にしたことを
語るのを聞いて、[神の] 恵みを願った。
私たちを守ってくれる恵みを。
ああ、聖マリア……

二十六日目にムーサは高い熱に冒され、
寝たきりになった。
そして聖マリアが現れて、
ムーサに言った。「来なさい。
ああ、聖マリア……

LXXIX

Esto fazeno a mu
grosa. pareceu en
sonnos sobre fiosa
con muitas menyas
de maravilosa. belad
e por en. **A**y Santa ma
ria. quen se por uos gua
quit e de folia. 7. f. f. be.
Oriseia lle anula.
ir con elas logo. 7.
mais Santa maria
lle duss en te rogo. 7.
que se migir qres
leixes rise logo. m
orgull e 7. eiten. 7.
Ay Santa maria.
Se esto fazes. m
dola tanta dias. 7.
seeris comig en.
nestas companias

de moças que ueer
que non son sandias
ca les non conue.
Ay Santa Maria
tant ouue anula.
fator das epinas
que en uison uira
qleuou las manas
7 fillou log outras
daquelas estranhas
7 non quis al ren
O Santa maria.
Pade e a madre
quando aqueito uir
preguntaron mula
7 pois quell oyon.
contar o que uira.
E derce pediron. 7.
a que nos manten
Ay Santa maria.
Os quinze dias. 7.
tal feuer aguda. 7.
fillou log a mula.
que iouue tenduda
7 Santa Maria. 7.
uouua parecida. 7.
que ue disse ven.
Ay Santa maria.
En pera mi Toste.
respos ue te grato.
7 quando o prazo
ros dias chegato.
foi seu esperito. 7.
ouue teus leuato.
u deus ouros ten.
Ay Santa maria.
Antos. 7. Por en
seia de nos rogado.
que eno loyzo. m.
u vera yrato. m.
que nos ache sen.
erit. 7 sen peccato.
E dizeo amez. 7.
Ay Santa Maria.

図1 エル・エスコリアル写本T第116葉裏 (Edición facsímil del códice T.1.1, 1979)

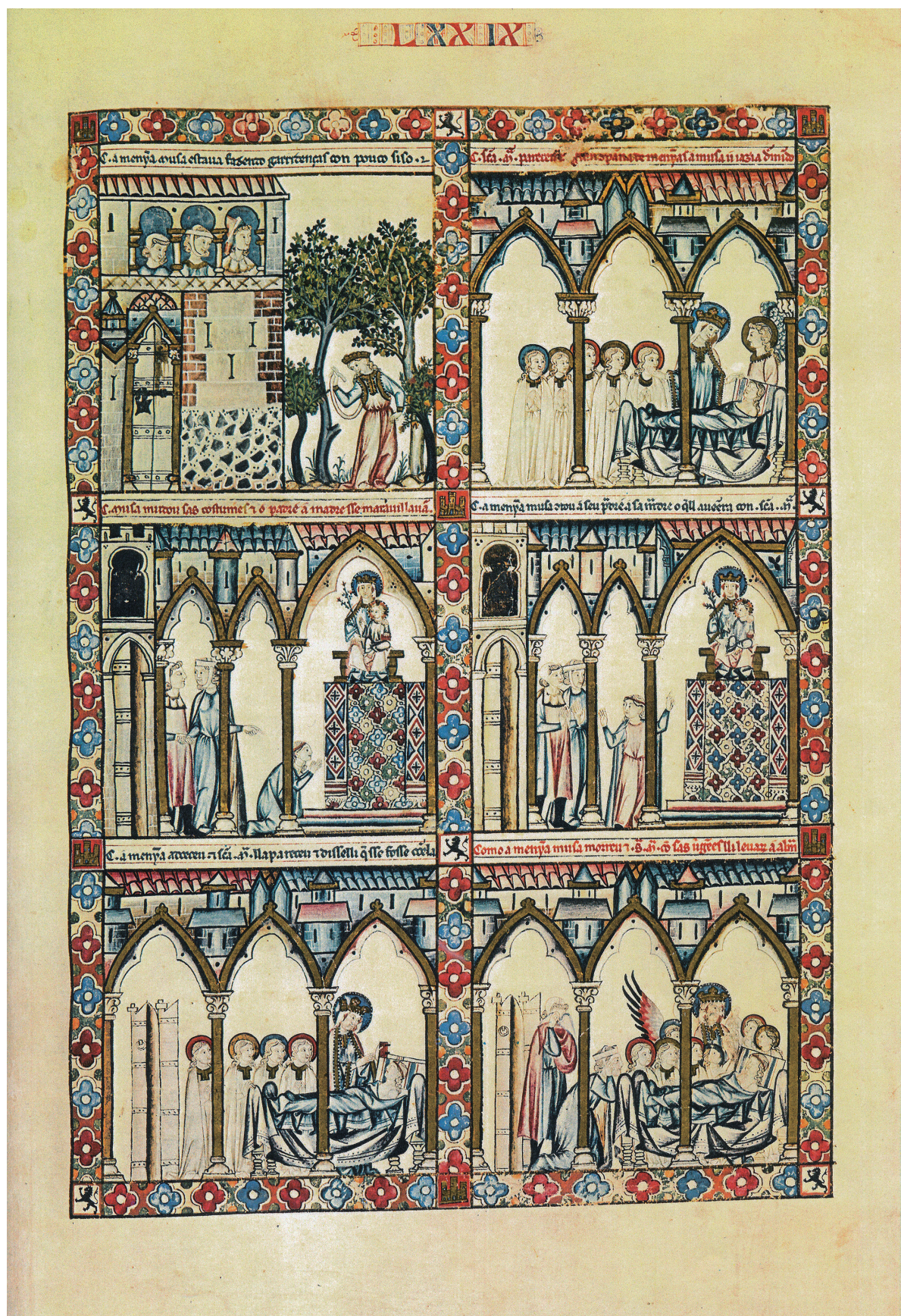


図2 エル・エスコリアル写本T第117葉表 (Edición facsímil del códice T.1.1, 1979)

[第9詩節]

- | | |
|--|-------------------------|
| 47 Ven pora mi toste. Respos-lle : De grado. | すぐに私のもとに来なさい」— ムーサは答えた。 |
| 48 E quando o prazo dos dias chegado | 「そうします」— やがて日数が満ちると |
| 49 foi, seu espirito ouve Deus levado | 神はムーサの靈魂を連れ去った。 |
| 50 u dos outros ten | 人々の靈魂を迎えるところへ。 |
| 51 <i>Ai, Santa María...</i> | ああ、聖マリア…… |

[第10詩節]

- | | |
|---|-------------------------|
| 52 Santos. E poren seja de nos rogado | 聖者の方々、そのために私たちは祈ります。 |
| 53 que eno juyzo, u verrá irado, | [最後の] 審判で[神の] 怒りのくだるとき、 |
| 54 que nos ache sen erro e sen pecado ; | 過ちも罪もなく私たちを見つけてくださいと。 |
| 55 e dized', amen. | 唱えなさい。アーメンと。 |
| 56 <i>Ai, Santa María...</i> | ああ、聖マリア…… |

幼いムーサの夢に聖母が現れた。清らかな少女たちをとめない、神の国でいっしょに自分に仕えるように促した。ムーサはその勧めにしたがい、三十日後に聖母が迎えにくるまで、つつましい日々を送るように努めた。そして夢で見た清らかな少女たちに伴われ、天に召されたのである。ひとりの少女の静かな死の物語である。奇跡といっても取り立てて起伏のない、夢そのままのような世界がそこに繰り広げられている。

1行目「落ち着きのなかった」«garrida»と訳した語は『讃歌集』でここにしか出てこない。ヴァルター・メットマンは「思慮の足りない」«travessa»と解し、フィルゲイラ・バルベルデは「軽率な」«ligerilla»、ラウラ・フェルナンデスは「分別がない」«alocada»と訳した⁽⁷⁾。「corda」も同様に、メットマンは「思慮深い」«sisudo»とし、バルベルデ、フェルナンデスともに「分別のある」«cuerda»とする。「corda」の名詞形«cordura»のみカンティーガ第36番12行に見える。これは嵐に襲われた船を聖母が救出する話で、イングランドへ向かった旅人たちは「思慮分別を備えた人々だが、誰もが命を落とすと思い、それは確実だとさとした」«que ren non lles valia siso nen cordura e todos cuidaron morrer, de certo o sabidades»とある⁽⁸⁾。ここでは«siso»と«cordura»が同義語として並置されており、どちらも「思慮」「分別」と訳することができる。第79番の場合は、かつて«garrida»であったのが聖母のおかげで«corda»になったというのだから、「思慮分別がない」状態から「思慮分別のある」状態に転じたと理解できる。ここでは幼い少女のことなので、落ち着きのない子が落ち着きを取り戻したと訳せるのではないか。

5行目に«folia»とある。字義どおりには「狂気」であり、精神の錯乱である。ただ、第94番48～49行に、修道院を逃げ出した修道女が異性と「多くの時を過ごした。男と狂おしいほどに」«e foi gran tempo durar con el en folia»とある⁽⁹⁾。彼女は精神の平衡を失ったわけではなく、激しく愛したということだから、「分別も忘れて」と解してさしつかえない。もちろん第79番の場合は字義どおり「気のふれた者も救われ」と訳することもできる。それならば、1行目も「気のふれた少女を正気に戻させ」と解せるわけだが、ここでカンティーガの写本に附された挿画を手がかりとして、その是非を考えてみたい。

エル・エスコリアル写本T (T.I.1) には第79番の挿画が附されている。この写本はアルフォンソ10世の宮廷工房で作成された。挿画制作のマエストロは徐々に交替しているが、第100番前後まではおおむね均一な作風を維持している⁽¹⁰⁾。写本Tの原典の編纂は1274年から77年までのあいだと推測される⁽¹¹⁾。写本の制作時期もここからあまり隔たらないだろう。アルフォンソ王の監督のもとで詩の筆写と楽譜および挿画の制作がなされた考えられている⁽¹²⁾。それならば個々の挿画はカンティーガの内容を的確に視覚化したものとして扱うことができよう。

カンティーガ第79番は写本Tの第116葉表から117葉表までの3葉を占めている。116葉表の第1列から裏の第1列途中まで楽譜が掲載され、以下第2列の末尾まで詩句が記されている [図1]。次の117葉表に挿画が配され、ほかの挿画と同様に写本の1葉全部を使って6つの場面が展開する⁽¹³⁾。これまでと同じように、1段目の向かって左を第1場面とし、3段目の右の第6場面へ進んでいく [図2]。

第1場面には戸外のようにすが描かれている。茂みのあいだに少女がひとり、ひらひらした帯のついた服を着て浮かれたようすである。いかにもうわついた少女の姿がそこにある。画面左の建物の上階から女性が3人そのさまを眺めている。冷ややかな表情である。上段の文字は「どのように少女ムーサが分別を欠いたふしだらなふるまいをしているか」*«cómo a menya Musa estava fazendo garridenças con pouco siso»* とある。「ふしだらにふるまう」*«fazer garridença»* と解した語は「めかし込む」とも訳せる。少女のいでたちには、おしゃれをしていい気になっているようすがたしかに現れている。

第2場面には三分割された尖塔アーチの下に室内のさまが描かれている。寝台で眠る少女のもとに冠をかぶった女性 — 聖母にちがいない — が白い衣をまとった幼い少女たちと天使を従えて現れ、何かを語りかけている。上段の文字は「どのように聖マリアが多くの中かまとともに臥して眠っている少女ムーサに現れたか」*«cómo sancta Maria parecêu con gran compañia de menyas a Musa ú jazía dormindo»* とある。

第3場面には右端の大きな尖塔アーチの下に台座に据えた聖母子像が描かれている。その下でひざまづいて祈る少女の姿がある。左手にいるのは両親であろう。娘を指さして語りあっている。上段の文字は「どのようにムーサが衣装を替え、父と母がそれに驚いたか」*«cómo Musa mudôu sas costumes e o padr' e a madre sse maravillavan»* とある。カンティーガの本文には衣装を替えたことは語られていない。地味な服装が注目されるなら、やはり以前の彼女は派手な格好で浮かれていたことになる。すくなくとも挿画を描いた画家はカンティーガの趣旨をそのように捉えたのではないか。

第4場面はほぼ同様の舞台設定で、少女が聖母子像を指さしながら両親に何かを説明するようすである。上段の文字は「どのように少女ムーサが聖マリアとともにあったことを父と母に語ったか」*«cómo a menya Musa contôu a seu padr' e a sa madre o quell' avê era con sancta Maria»* とある。

第5場面にはふたたび寝台に臥した少女に聖母が語りかけるさまが描かれている。白い衣のなかまたちが少女を囲んでいる。上段の文字は「どのように少女が病気になる、そして聖マリアが彼女に現れて、ともに行くことを語ったか」*«cómo a menya adoecêu e sancta Maria ll' aparecêu e dísselli que sse fosse con ela»* とある。

第6場面には少女の臨終のさまが描かれている。聖母が嬰兒の姿をした魂を抱きかかえ、天上に運

ぼうとするかのようなのである。白い衣のなかまたちと天使も枕もとに寄り添う。あまたの中世絵画に描かれた聖母の御眠りの場面のようである。両親は涙を流しながらそのようすに見入っている。これもカンティーガには記述がない。上段の文字は「どのように少女ムーサが亡くなり、そして聖マリアが少女たちとその魂を連れていったか」*«cómo a menya Musa morréu e San[c]ta Maria con sas vírgenes lli levaron a alma»* とある。

写本挿画に描かれた6つの場面をこのように読み取ってみた。カンティーガに語られたところを画家が補ったと思われるところもすくなくない。しかしそれは恣意的な追加ではなく、むしろ視覚的にパラフレーズしたものと捉えてよい。これによって文字に語られた世界をさらに明瞭に理解することができよう。

3. 物語の源泉とその展開

グレゴリウス教皇の『対話』第4巻18節に「少女ムーサの他界」*«De transitu Musae puellae»* と題する奇跡の話が出てくる。カンティーガの源泉となったラテン語の物語を以下にたどっていく。ここから後世に忠実に継承されたものと新たな展開を示したものを明らかにしたい。

はじめに教皇自身の述懐が語られる。「まえに名を示した神のしもべプロビュスが幼い妹ムーサについてこころよく語ったことがある。これを秘しておくのはしのびない」*«Sed neque hoc sileo, quod praedictus Probus Dei famulus de sorore sua, Musa nomine, puella parua narrare consuevit»* とある。それから次の話を紹介している⁽¹⁴⁾。

«dicens quod quadam nocte ei per uisionem sancta Dei genitrix uirgo Maria apparuit, atque coaeuas ei in albis uestibus puellas ostendit. Quibus cum illa admisceri adpeteret, sed sese eis iungere non auderet, beatæ Mariæ semper uirginis est uoce requisita, an uellet cum eis esse atque in eius obsequio uiuere. Cui cum puella eadem diceret : Volo, ab ea mandatum protinus accepit, ut nil ultra leue et puellare ageret, a risu et iocis abstinere, sciens per omnia quod inter easdem uirgines, quas uiderat, ad eius obsequium die trigesimo ueniret. Quibus uisis, in cunctis suis moribus puella mutata est, omnemque a se leuitatem puellaris uitæ magna grauitatis deterisit manu. Cumque eam parentes eius mutatam esse mirarentur, requisita rem retulit, quid sibi beata Dei genitrix iusserit uel qua die itura esset ad obsequium eius indicauit. Cum post uicesimum et quintum diem febre correpta est. Die autem trigesimo, cum hora eius exitus adpropinquasset, eandem beatam genitricem Dei cum puellis, quas per uisionem uiderat, ad se uenire conspexit. Cui se etiam uocanti respondere coepit, et depressis reuerenter oculis aperta uoce clamare : Ecce, domina, uenio. Ecce, domina, uenio. In qua etiam uoce spiritum reddidit, et ex uirgineo corpore habitatura cum sanctis uirginibus exiuit.»

「いわく、ある夜のこと、ムーサの夢に神の聖なる母でつねに処女なるマリアが現れ、白い衣を着た同じ年の少女たちを彼女に見せた。ムーサは彼女たちといっしょになるのを願ったが、思い切ることができなかった。つねに処女なる至福のマリアは、ムーサに彼女たちとともに自分に仕えて生きてい

くことを望むかと尋ねた。ムーサは答えた。そうしますと。そこで処女マリアは、三十日の後にその目を見た少女たちとともに自分に仕えるように疑いなくなるためには、ムーサにもう軽はずみなことや子どもじみたことはしないように、また笑ったりふざけたりするのを控えるよう命じた。この夢のあと、少女はまったく変わった。真摯な生活を送るため、ただちに軽薄なおこないを慎んだ。両親はこの変わりように驚いた。問いただされてムーサは至福の神の母が自分に命じたことを語り、神の母に身を捧げる日を告げた。二十五日の後にムーサは熱が出た。三十日目亡くなる時、神の母と夢で見た少女たちをふたたびを見た。マリアがムーサに声をかけると、少女は答えた。敬意をもって目を伏せ、はっきりした声で答えた。私はここにいます。マリアさま。ここにいます。マリアさま。この言葉とともにムーサは魂を「天に」もどした。聖なる少女たちと暮らすため、その魂は少女の体を抜け出たのである」

ムーサの魂は天にもどっていったという。それだからこの話のタイトルに「移行」を意味する「transitio」の語を用いたのだろう。先ほど「他界」と訳したが、これは聖者伝に頻繁に用いられる言葉である。これはつまり少女に起きた奇跡を語る聖者伝なのである。とはいえ、たいていの聖者伝に出てくる殉教の場面はない。ここに記述されているのは、ひとつの幼い魂の穏やかな天への移行である。至福の死の描写と言ってもよい。

この話を聞いた助祭ペトルスは次のように語った⁽¹⁵⁾。「人々は数知れぬほど多くの悪しきおこないのもとにあるだから、天のエルサレムはとりわけ子どもと赤子が住むべき場所にちがいないと私は考える」*«Cum humanum genus multis atque innumeris uitii sit subiectum, Hierusalem caelestis maximam partem ex paruulis uel infantibus arbitror posse conpleri»* とある。これがグレゴリウス教皇の対話集における教訓にあたる。それはまた新約聖書の次の話を思い出させよう。「ルカによる福音書」の話である（第18章15～18節）。

イエスに触れてもらおうとして人々が子どもたちを連れてきた。それを見た弟子たちがとがめると、イエスは子どもたちが自分のもとに来るのをとめてはいけないと言った。神の国はこのような者たちのものだからだという。「まことに私は言う。幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこに入ることはできない」*«Amen dico vobis quicumque non acceperit regnum Dei sicut puer non intrabit in illud»* とある⁽¹⁶⁾。ムーサの純真を理解する鍵はやはりここにあるだろう。

ラテン語によるムーサの奇跡の物語を俗語に移し換えたものがアドガルの『恩寵の書』第23章に見える。これは1165年頃に編纂された書物であり、中世フランス語の系統に属するアングロ・ノルマン語で書かれた聖母奇跡集成の最初の代表的作品とされる。以下にテキストと試訳を示す⁽¹⁷⁾。

Ceo ne fait pas a celer
k'un saniz hom selt cunter
de sa soer ke Muse esteit dite.
Pucele esteit e bien petite.
Une nuit, par avisium,
li aparut cele par nun,

誰も知らぬ者はいない。
ムーサという名の妹について
ひとりの聖者が語ることを。
少女はとても幼なかった。
ある夜のこと、夢のなかで
ムーサに現れたのは、

ki est mere Deu apelee
 Sainte Marie Boneuree,
 e mostra li seintes pucele
 en blanks vestemenz forment beles ;
 Cum Muse requist bonement
 meller sei od cel saint covent,
 mais ne ert uncore si hardie,
 dunc demanda sainte Marie
 s'ele voleit estre en lur franchise
 e vivre si en son servise.
 Cum la pucele li diseit
 ke son plaisir faire voleit,
 ignelment li respondi
 la dame si li defendi,
 ke si dunc ne feïst rien
 ke ne turnast a grant bien ;
 De gas se estenist durement
 e de risees ensement.
 e dist li bien que ele vendreit
 as puceles ke ele veeit,
 al trentime jor veirement,
 ne vivreit plus lungement.
 Quant la pucele out enteudue
 l'avisium que ele out veüe,
 sun curage turna en bien,
 si devient puis mult sainte rien,
 n'aveit cure mais de folie,
 demenat puis mult sainte vie.
 Quant si parent tele la virent
 muee, e bien ne l'entendirent,
 purquei ceo fust ne recorderent,
 a li meimes le demanderent.
 E la pucele tut lur dit,
 cum Nostre Dame en dormant vit,
 coment la bone Marie
 li defendi tute folie ;
 le jur de sa fin lur redit,

至福なる聖マリアと
 呼ばれる神の母。
 マリアは彼女に清らかな少女たちを見せた。
 白い衣を着た美しい少女たちを。
 ムーサはよろこんで、
 この清らかな交わりに加わりたと思った。
 だがムーサはまだ思い切れなかった。
 そこで聖マリアは尋ねた。
 なかまに加わりたいかと。
 そして自分に仕えて生きていかないかと。
 少女は聖母に言った。
 よろこんでそうしたいと。
 すぐにそう答えると、
 聖母はムーサに命じた。
 よいことだけに目を向けて、
 ほかには何もしないようにと。
 ふざけて笑ったりするのを
 気をつけて避けるようにと。
 そしてマリアはムーサに明らかにした。
 ムーサが見た少女たちと
 三十日たつといっしょになり、
 そのとき命が尽きることを。
 少女は自分の見た夢を
 理解したとき、
 心をよい方へ向けた。
 彼女は大いに清められ、
 あらゆる過ちから守られた。
 それからとても清らかな生活を送った。
 両親がそのように変わった娘を見たとき、
 彼らは理解しなかった。
 娘に何が起きたのかを。
 そして娘に聞いた。だした。
 少女は両親にすべてを語った。
 眠っているとき聖母が見せたことを。
 どのようにして心優しいマリアが
 自分をあらゆる過ちから守ってくれたかを。
 自分の死ぬ日を両親に告げた。

quant rendre deut son esperit.
Après le vint e le quint jor
la prist la fièvre a grant dolor.
Cum li trentisme jor avint
e la dereine ure la tint,
donc revint ele veirement,
la dame od cel meimes covent
ke ele vit ainz en son dormir.
Ore les veit a sei venir.
Ses oilz ducement ovri
e a sei clamant respondi :
Jo vienc, dame, jo vienc aneire,
vostre parole est sainte e veire.
Od cele voiz e od cel dit
al ciel rendi sun esperit
en grant joie finalement.
La seium nus communalment.

そのとき魂が「天国に」もどることを。
それから二十五日たって、
苦しい熱がムーサを捕らえた。
三十日目になって、
最後の時が訪れた。
そのとき聖母が言葉どおりに再来した。
同じなかまたちを連れて。
眠っているとき見たなかまたちと。
そのときムーサのもとに来るのが見えた。
ムーサは穏やかに目を開けた。
そして呼ばれるとはっきり答えた。
「私は行きます。マリア様、すぐに行きます。
あなたの言葉は清らかで真実です」と。
その言葉とともに、
少女は魂を天にもどした。
永遠のよろこびのなかに。
私たちもともにいられるように「祈ろう」。

アドガルの詩は古いフランス語のもつ簡潔な美しさがきわだっているが、内容はグレゴリウス教皇の伝えるムーサの話はかなり忠実に韻文に移し換えたものと言える。そのなかになんとかラテン語のものと話に対応しない語句がある。とりわけ次の言葉が目をはなす。

聖母を夢に見たムーサが生活をあらためた。そのとき「彼女は大いに清められ、あらゆる過ちから守られた」«si devient puis mult seinte rien, n'aveit cure mais de folie» とある。また、ムーサのようすが変わったのを見て両親が問いただしたとき、彼女が答えた言葉のなかに、「どのようにして心優しいマリアが自分をあらゆる過ちから守ってくれたか」«Coment la bone Marie li defendi tute folie» と告げたとある。ここで「過ち」と訳した言葉はいずれも «folie» である。これは一般的には「狂気」と訳される。しかしアドガルはそうした意味でこの語を用いていない⁽¹⁸⁾。

『恩寵の書』第21章に聖母に足の病を癒やされた男の話が出ている⁽¹⁹⁾。プロヴァンス地方のある町の教会でのことである。「たいへん具合の悪そうな男がそこに来た。片方の足が焼けるようだ」«Uns hoem i vint ki out mal grant en l'un pié ki tut ert ardant» とある (13～14行)。教会で祈りつづけたが一向に治る気配がない。男はたまりかねて叫んだ。「苦しい、苦しい、死にそうだ。私の罪のせいで心優しい聖マリアも私を見放されたのか」«Jo doil, jo doil, de doel murrai, ki tant sui luinz, par ma folie, de la duce sainte Marie» とある (49～51行)。ここに出てくる «folie» は男が犯した「罪」のことを言っている。気が狂ったわけではない。その後に男が「いったい何の罪か」«quel est li pechiez» と問う場面がある (58行)。はっきり「罪」«pechiez» と言い換えている。ここからもアドガルが「罪」あるいは「過ち」の意味で «folie» の語を用いたことが了解できよう。

ラテン語の文章にはなかった言葉がここに加わったことで、これ以降に語られたムーサの物語は、

通常ならば「狂気」を意味する «folie» の語に引きずられたのではないか。カンティーガ第79番の場合も、記された文字からはムーサが気がふれていたと解することも可能だった。しかし『讃歌集』のほかの用例や写本挿画の表現からは、彼女がただ子どもじみた振る舞いをしていただけだと認識できた。むしろ内容は最初のラテン語の文章から大きく隔たるものではなかった。

ムーサの物語は発端となったグレゴリウス教皇の話がすでに魅力あるものだった。それがいくつかの言語に移されて伝わったわけだが、そこでは情景描写のゆたかな拡がりが必要となる。登場人物はほぼすべて女性であり、ムーサの父親は何ほどの役割も果たしていない。たおやかな雰囲気の中で神聖なドラマが展開していく。

アングロ・ノルマン語の詩でもガリシア＝ポルトガル語のカンティーガでも直接話法の会話はいたってすくない。ムーサが語るのはその魂が聖母に迎えられるときだけである。前者では、「私は行きます。マリア様、すぐに行きます。あなたの言葉は清らかで真実です」«Jo vienc, dame, jo vienc aneire, vostre parole est sainte e veire»とある。後者では聖母の言葉、「来なさい。すぐに私のもとに来なさい」«Ven, Ven pora mi toste»に応じて、ムーサは「そうします」«De grado»と答えるだけある。会話は抑制され、簡素であることがかえって信念を感じさせる。

ムーサにとっては天へのあこがれだけで十分であった。そのひたむきさがイングランドの詩に現れており、イベリアのカンティーガに一層よく現れている。もとのラテン語の散文は事実の叙述である。ここはやはり韻文のもつ表現の力が大きかろう。しかも俗語で語られている。より直裁に感情が表出されている。

幼い者のまえに聖母が現れ、魂を神のもとへ召していく。これはのちにカトリック世界で起きた聖母の御出現 mariophania につながるのではないか。1858年に南フランスのルルド Lourdes でひとりの少女に聖母が現れた。ベルナデット・スビルー Bernadette Soubirous はこのとき14歳である。ほどなくここがヨーロッパで最大の巡礼地のひとつになっていく。ベルナデッタはのちに修道女となり、35歳で亡くなった。

聖母出現の恩寵は20世紀のイベリアにもくだされた。1916年、ポルトガルのファティマ Fátima でルシア Lúcia とフランシスコ Francisco とジャシント Jacinta のまえに聖母が現れた。いずれも14歳から15歳の子どもたちである。1961年、スペイン北部のガラバンドル Garabandal の村に住む4人の少女に聖母が現れた。コンチータ Conchita とマリ・ロリー Mari Loli とマリ・クルス Mari Cruz とハシント Jacinta はこのとき11歳から12歳だった。

天のエルサレムは子どもたちのいるところ — グレゴリウス教皇と対話をかわした人の言葉である。誰もが忘れかけているそのことを聖母のカンティーガは響きのやわらかい詩の言語によって伝えたのである。

4. 修道士の口から花が

『聖母マリア讃歌集』第56番は無学なひとりの修道士に起きた奇跡の話である。ひたすら聖母を慕うだけの男で、わずか5篇の聖歌を唱えることしかできなかったが、亡くなったあとに口から5本の薔薇が現れたという。ここにもムーサの世界に通じるものがありそうな予感がする。

このカンティーガに先行してゴージェ・ド・コワンシーの『聖母の奇跡集』に中世フランス語の

詩があり、さらにゴンサロ・デ・ベルセオの奇跡集成にもカスティーリャ語の詩がつづられている。
のちほど比較をこころみたい。テキストと試訳を以下に示す⁽²⁰⁾。

[題辞]

- 1 Esta é de como Santa Maria fez nacer as cinco rosas na boca do monge
- 2 depos ssa morte, polos cinco salmos que dizia a onrra das cinco leteras
- 3 que á no seu nome.
- 1 これはどのように聖マリアが修道士の口から五本の薔薇を生じさせたかを語るもので、
- 2 それは修道士が亡くなってまもなくのことであり、マリアの名が示す五つの文字
- 3 [M・A・R・I・A] を讃える五つの聖歌を彼が唱えていたことによる。

[反復句]

- | | |
|--------------------------------------|--------------------|
| 4 <i>Gran dereit' é de seer</i> | それはまったく正しいこと。 |
| 5 <i>seu miragre mui fremoso</i> | 処女マリアの奇跡がうるわしいことは。 |
| 6 <i>da Virgen, de que nacer</i> | 私たちのために栄光の主を |
| 7 <i>quis por nos Deus grorioso.</i> | 産んだ御方の奇跡は。 |

[第1詩節]

- | | |
|-------------------------------------|-------------------|
| 8 Poren quero retraer | それだから私は語りたい。 |
| 9 un miragre que oý, | 私が聞いた奇跡のことを。 |
| 10 ond' averedes prazer | あなた方もそれを聞けば、 |
| 11 oyndo-o outrossi, | 同じようによろこぶだろう。 |
| 12 per que podedes saber | 大いなる恵みについて、 |
| 13 o gran ben, com' aprendi, | 知るだろうから。私が学んだように、 |
| 14 que a Virgen foi fazer | 処女マリアがひとりの善良な修道士に |
| 15 a un bon religioso. | もたらした恵みについて。 |
| 16 <i>Gran dereit' é de seer...</i> | それはまったく正しいこと…… |

[第2詩節]

- | | |
|-------------------------------------|---------------------|
| 17 Este sabia leer | 私が聞いたところでは、その修道士は |
| 18 pouco, com' oý contar, | ほとんど字を読むことができなかった。 |
| 19 mas sabia ben querer | けれども、ならぶもののない処女マリアを |
| 20 a Virgen que non á par ; | 心から愛することができた。 |
| 21 e poren foi compõer | 彼女をもっと讃えるために、 |
| 22 cinque salmos e juntar, | 五つの聖歌を創作して、 |
| 23 por en ssa loor cre[c]er, | ひとつにまとめた。 |
| 24 de que era desejoso. | それはみずから望んだことだった。 |
| 25 <i>Gran dereit' é de seer...</i> | それはまったく正しいこと…… |

[第3詩節]

- | | |
|----------------------------|------------|
| 26 Dos salmos foi escoller | 聖歌のなかから五つを |
|----------------------------|------------|



図3 パリ国立図書館 nouv. acquis. fr. 24541 第55葉表 (<https://gallica.bnf.fr>)

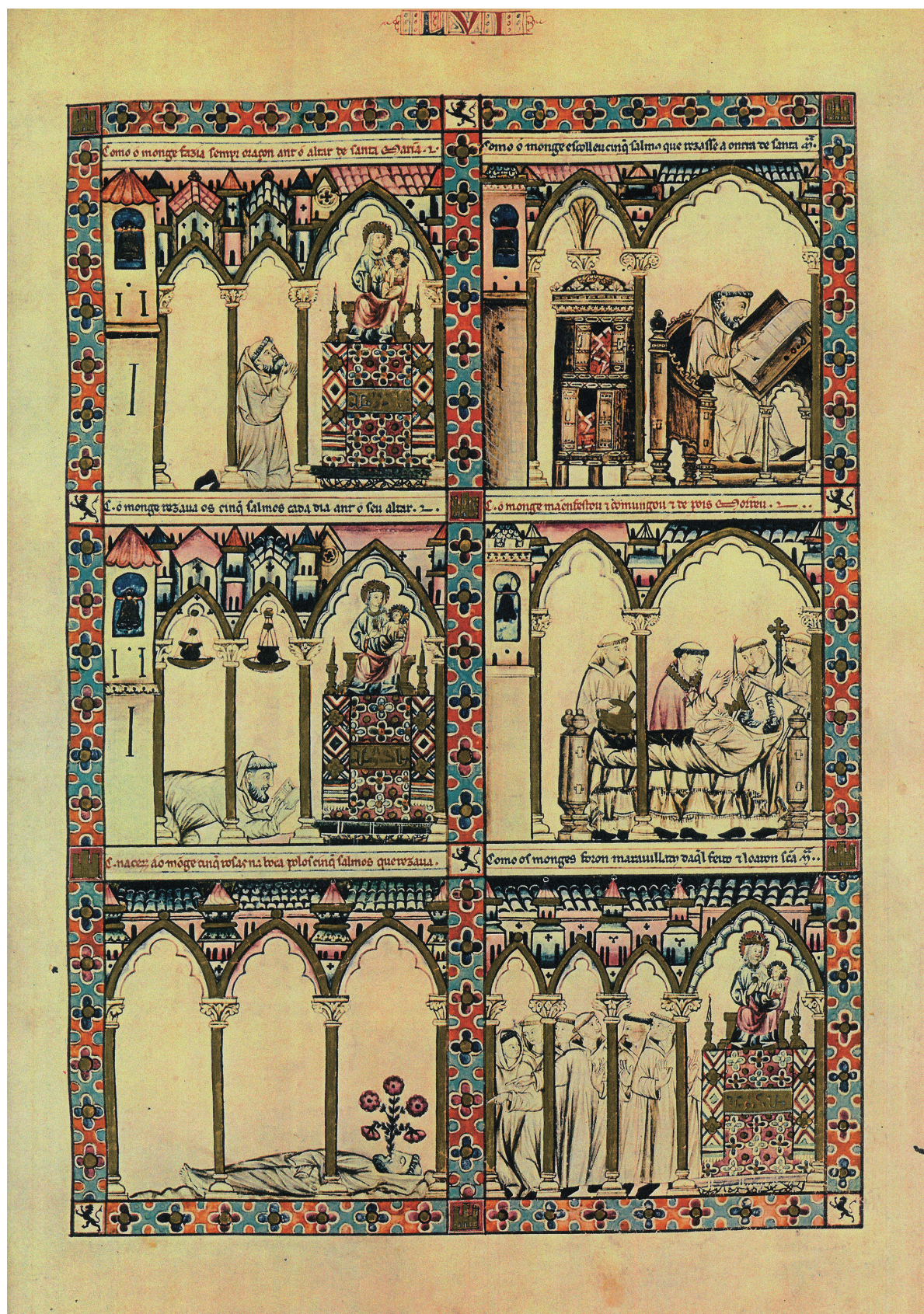


図4 エル・エスコリアル写本T第83葉表 (Edición facsímil del códice T.I.1, 1979)

27 cinco por esta razon
28 e de ssũu os pões
29 por cinque letras que son
30 en Maria, por prender
31 dela pois tal galardón,
32 per que podesse veer
33 o seu Fillo piadoso.
34 *Gran dereit' é de seer...*

[第４詩節]

35 Quen catar e revolver
36 estes salmos, achará
37 magnificat y jazer,
38 e ad dominum y á,
39 e cabo del inconver-
40 tendo e ad te está,
41 e pois retribue ser-
42 vo tuo muit' omildoso.
43 *Gran dereit' é de seer...*

[第５詩節]

44 Pera ben de Deus aver,
45 ond' aquestes, sen falir,
46 salmos sempr' ya dizer
47 cada dia, sen mentir,
48 ant' o altar e tender-
49 se todo e repentir
50 do que fora merecer
51 quand' era fol e astroso.
52 *Gran dereit' é de seer...*

[第６詩節]

53 Est' uso foi mantêr
54 mentre no mundo viveu ;
55 mas pois, quand' ouv' a morrer,
56 na boca ll' apareceu
57 rosal, que viron têr
58 cinque rosas, e creceu
59 porque fora bẽeizer
60 a Madre do Poderoso.

選んだというそのわけは、
マリアの名を成す五つの文字を
集めて合わせるため。
それはいつか、慈悲深い
聖母の御子〔イエス〕に
まみえることができるという
そんな恵みにあずかるため。
それはまったく正しいこと……

これらの聖歌に注意して
目を通す人は気づくだろう。
「主をたたえ」〔の歌〕を見だし、
そして「主を呼ぶと」と、さらに
「主が帰されたとき」と、そのあとに
「あなたを〔仰ぎ見る〕」と、最後に
へりくだって、「あなたのしもべを
生きさせ」〔の歌〕を見いだすだろう。
それはまったく正しいこと……

神の恵みをさずかろうと
これらの聖歌を欠かさずに
いつも唱えつづけ、
いつわることなく、
祭壇のまえで身をすべて
投げ出して悔いていた。
おろかでみじめだったとき、
自分が犯してしまったことを。
それはまったく正しいこと……

この習慣を世にあるあいだ、
ずっとつづけてきた。
しかしやがて亡くなったとき、
口から薔薇の木が現れた。
そこには薔薇の花が五つあり、
花開いているのが見えた。
それは力ある聖母をいつも
祝福していたからだった。

61 *Gran dereit' é de seer...*

それはまったく正しいこと……

修道士が生前に唱えたという5篇の聖歌はいずれも旧約聖書「詩篇」にその原典を求めることができる。いずれもラテン語訳ヴルガータから取られている⁽²¹⁾。

最初の聖歌「主をたたえ」*«Magnificat»* は「詩篇」第33番4節の「私とともに主をたたえ、ともにその御名をあがめよう」*«Magnificate Dominum mecum et exaltemus nomen eius in idipsum»* にもとづく。通常カトリック教会で歌われる「マニフィカート」は、新約聖書「ルカによる福音書」第1章46節に記された言葉をもとにしている。マリアが天使から神の子を宿したことを告げられる場面である。「私の魂は主をたたえ、私の心は救い主である神においてよろこび踊っています」*«Magnificat anima mea Dominum et exultavit spiritus meus in Deo salutari meo»* とある。だが、ここでは修道士が唱えた聖歌の原典はほかとのつながりから考えて旧約聖書の方であろう。

2番目の聖歌「主を呼ぶと」*«Ad Dominum»* は「詩篇」第120番1節の「苦しみのとき私が主を呼ぶと、主は答えられた」*«Ad Dominum cum tribularer clamavi et exaudivit me»* による。3番目の聖歌「主が帰されたとき」*«In convertendo»* は「詩篇」第126番1節の「主がシオンの捕われ人を帰されたとき、私たちは夢見る心地だった」*«In convertendo Dominus captivitatem Sion facti sumus sicut consolati»* による。4番目の聖歌「あなたを[仰ぎ見る]」*«Ad te»* は「詩篇」第123番1節の「私はあなたを仰ぎ見る、天にいますあなたを」*«Ad te levavi oculos meos qui habitas in caelo»* による。5番目の聖歌「あなたのしもべを生きさせ」*«Retribue servo tuo»* は「詩篇」第119番17節の「あなたのしもべを生きさせ、生きてあなたの言葉を守らせてください」*«Retribue servo tuo vivifica me et custodiam sermones tuos»* による。この5篇の聖歌の歌い出しの文字を組みあわせると M・A・R・I・A になる。

修道士はこれらの聖歌をいつも唱えながら、「おろかでみじめだったとき、自分が犯してしまったこと」*«do que fora merecer quand' era fol e astroso»* を悔いていたとある。ここはこのカンティーガを理解するうえで重要な箇所だと思う。第56番ではこれだけしか語られていないが、中世フランス語とカスティーリャ語の詩と対比することで浮かびあがてくることがある。まず前者から読んでいきたい。

ゴーティエ・ド・コワンシーの『聖母の奇跡集』に収められた詩は、題辞に「口からあざやかな薔薇の花が見つかった修道士について」*«D'un moigne en cui bouche on trouva cinc roses noveles»* とある。テキストと試訳を以下に示す⁽²²⁾。

Un brief miracle mout aoinne
conter vos veil d'un symple moine.
Symples estoit et symplement
servoit Dieu et devotement.
N'iert pas telz clers com sainz Ansiaumes
sa miserele et ses set saumes
et ce qu'apris avoit d'enfance

ひとりの純朴な修道士に起きた、
美しい小さな奇跡をあなた方に語りたい。
その修道士は純朴でひたすら神に仕え、
そして信心深かった。
聖アンセルムスのような修道士ではないが
「哀れみたまえ」[の聖歌]と七つの聖歌
そして子どものときに覚えた聖歌を

disoit par mout bone creance
 selonc sa symple entencion
 servoit par grant devocion
 la mere Dieu, que mout amoit.
 A nus genolz la reclamoit
 tout em plorant par maintes fois.
 Mais mout estoit ses cuers destrois
 et destorbez de grant maniere
 quant ne savoit propre proiere
 dont il fesist propre mimoire
 de la propre dame de gloire.
 Il en fu tant en grant porpens
 c'une en trova selonc son sens :
 cinc saumes prist, ses maria
 as cinc lettres de Maria.
 Tant eut de sens qu'il seut bien metre
 une saume a chascune lettre ;
 N'i quist autre phylosophye.
 ou non de la virge Marie,
 que mout amoit et tenoit chiere,
 disoit sovent ceste proiere.
 De ces cinc saumes sont li non :
 Magnificat, Ad Dominum,
 Retribue servo tuo ;
 la quatre est Inconvertendo,
 Ad te levavi la cinquisme.
 En l'oneur dou doz non saintisme
 dist ceste sainte saumoidie
 tant con dura et fu en vie,
 et quant Dieu pleut qu'a sa fin vint,
 mout biaux myracles en avint,
 car trovees furent encloses
 en sa bouche cinc fresches roses
 cleres, vermeilles et foillies
 com se luez droit fuissent coillies.
 Cis myracles bien nos esclaire
 qu'amyable est et debonaire

大いなる良き信心によって唱えていた。
 純朴な思いに支えられ、
 大いに愛していた神の母に
 献身をもって仕えた。
 ひざまづいて聖母にすがった。
 いくたびも涙を流しながら。
 しかし彼の心はとても苦しみ、
 はげしく乱されていた。
 自分だけの祈りを知るばかりだったから。
 彼が覚えているだけの
 栄光の婦人にふさわしい〔祈りを〕。
 彼はよくよく考えをめぐらせ、
 自分の知恵にもとづいて、
 マリアの五つの文字から取った
 五つの聖歌を作った。
 それはすなわち、それぞれの文字に聖歌を
 ひとつずつあてはめたということである。
 そこに深い考えを込めたわけではなく、
 彼が愛し、大切に思い、
 いつも祈りを唱えている
 処女マリアの名を求めただけである。
 この五つの聖歌について、それらの名は、
 「主をたたえ」と「主を呼ぶとき」
 「あなたのしもべを生きさせ」
 四番目は「主が帰されたとき」
 「あなたを仰ぎ見る」が五番目である。
 うるわしく至聖なるその名を讃え、
 聖歌の朗唱を長いあいだ、
 生涯にわたってつづけ、
 その終わりが訪れたとき、
 神は美しい奇跡を起こされた。
 口のなかに含まれていた五つの
 新鮮な薔薇の花が見つかったのである。
 明るくあざやかな赤で、葉に覆われ、
 いま摘み取られたばかりのようだった。
 この奇跡は栄光の主のうるわしい母が
 心やさしく愛情に満ちていることを

la douce mere au roi de gloire.

私たちにはっきりと教えてくれる。

ここに登場する修道士は「純朴でひたすら神に仕え、そして信心深かった」*«Symples estoit et symplement servoit Dieu et devotement»* という。この修道士も苦しんでいたというが、何かの罪を犯したからではなさそうである。「自分だけの祈りを知るばかりだったから」*«quant ne savoit propre proiere»* というのがその理由とされる。

『聖母の奇跡集』の写本には挿画を附したものがある。サン・メダル・デ・ソワッソン修道院旧蔵の写本はこの修道士の臨終の場面を描いている⁽²³⁾。現在はパリ国立図書館フランス語新収写本第24541番に登録され、55葉裏の挿画の題辞に「修道士が亡くなったあと、口のなかに見いだされた五つの薔薇について」*«De cinc roses qui furent trouuees en la bouche au moine apres sa mort»* とある [図3]。

挿画に描かれているのは修道士の臨終の場面である。同僚たちがこれを取り囲んで歎き悲しんでいる。右端の人物は十字架のついた杖を携える。その隣りの人物は白い祭服をまとい、左手に聖水の容器を持ち、右手で灌水器 *goupillon* (中世フランス語の *«guipellon»*) を振っている。告解と聖体拝領を終えた直後の情景であろう。寝台に横たわる修道士の口もとに白い薔薇が五つ見える。

ゲーティエの詩では薔薇は「あざやかな赤で、葉に覆われ」*«vermeilles et foillies»* とあった。この写本にも56葉裏の21行目に *«uermeilles et follues»* とあり、文字に異同はあるが鮮紅色であることが記されている。挿画の薔薇は白で、葉に覆われていない。

ここでカンティーガの写本挿画と比較してみたい。第56番は写本Tの第82葉裏から83葉表までの2葉を占めている。82葉裏の第1列に楽譜が掲載され、第2列に詩句が記されている。次の83葉表に挿画が配され、ほかと同じく1葉全体に6場面が展開する [図4]。ここでも1段目の向かって左を第1場面とし、3段目の右の第6場面へ進んでいく

第1場面には右端の大きな尖塔アーチの下に台座に据えた聖母子像が描かれている。その下でひざまづいて祈る修道士の姿がある。上段の文字は「どのようにその修道士が聖マリアの祭壇のまえでいつも祈っていたか」*«cómo o monge fazia sempr' oraçón ant' o altar de santa Maria»* とある。

第2場面には右端の大きな尖塔アーチの下で書物をひもとく修道士が描かれている。書見台に載せた写本に見入っており、脇の棚には書物が乱雑に収めてある。上段の文字は「どのようにその修道士が聖マリアを讃えて唱えた五つの聖歌を選んだか」*«cómo o monge escolleu cinque salmos que rezasse a onrra de santa Maria»* とある。

第3場面には1段目の左とほぼ同じ情景が描かれている。修道士は聖母子像の祭壇の下でひれ伏すようにして書物を広げている。上に灯油のランプが吊ってあるから夜中だろうか。上段の文字は「どのようにその修道士が毎日祭壇のまえで五つの聖歌を唱えたか」*«cómo o monge rezava os cinque salmos cada día ant' o seu altar»* とある。

第4場面には寝台に臥して手を合わせる修道士が描かれている。4人の同僚が彼を見守る。右端の人物は十字架のついた杖を携える。右から3番目の人物は緋色のマントをまとっているから司祭であろう。修道士に聖杯をすすめている。これは臨終の聖体拝領の場面にちがいない。左端の人物が手にするのは聖水の容器であろう。上段の文字は「どのようにその修道士が告解し、聖体拝領し、その後

に亡くなったか」«cómo o monge mañfestóu e comungóu e depois morréu» とある。

第５場面には三分割された尖塔アーチの下にあおむけに横たわる修道士が描かれている。遺体の口から薔薇の木が生え、赤い花が五つ咲いている。上段の文字は「どのようにその修道士が五つの聖歌を唱えたことによって五つの薔薇を口から生じさせたか」«cómo naceron a o monge cinque rosas na boca polos cinque salmos que rezava» とある。

第６場面には聖母子像の祭壇のまえに集まった修道士たちが描かれている。両手を広げて驚きの表情を示す者もいれば、左手の場面に横たわった修道士を指さす者もいる。上段の文字は「どのように修道士たちがこの出来事に目をみはり、聖マリアを讃美したか」«cómo os monges foron maravillados d' aquel feito a loaron sancta Maria» とある。

中世フランスとイベリアの写本挿画をくらべてみれば、前者は典雅、後者は無骨と言えようか。薔薇の表現にそれが顕著にうかがえる。フランスの写本では修道士は眠るように息を引き取っており、口もとから白い花びらがこぼれ出る。イベリアの写本では薔薇の木が口から直立し、真っ赤な大輪の花を咲かせている。まるで芝居道具のようだが、この気取りのなさがいかにも修道士その人を彷彿とさせる。

5. 罪にまみれた男の生涯

次にゴンサロ・デ・ベルセオの『聖母の奇跡集』を読んでみたい。第３番は「聖職者と花」«El clérigo y la flor» と題された詩である。中世カスティーリャ語で書かれたこの集成は1252年までに編纂されたと考えられており、『讃歌集』にいくらか先行する時代の作品である。テキストと試訳を以下に示す⁽²⁴⁾。

[第１詩節]

Leemos de un clérigo que era tiestherido	知恵の足りないひとりの聖職者のことを語ろう。
ennos vicios seglares feramient embevido ;	その男は俗世の悪癖をしばしばくりかえし、
pero que era loco, avié un buen sentido :	気が変であったが、よいところがひとつあった。
amava la Gloriosa de corazón complido.	栄光の御方[聖母]を心の底から愛していたのである。

[第２詩節]

Comoquiere que era en ál mal costumnado,	悪い習慣に染まっていたにしても、
en saludar a ella era bien acordado ;	聖母をうやまうことには分別があった。
nin irié a eglesia nin a ningún mandado	教会に行くときも務めをおこなうときも、
que el su nomne ante non fuesse aclamado.	そのまえに聖母の名を唱えないことはなかった。

[第３詩節]

Dezir no lo sabría sobre cuál ocasión,	どのようなきっかけかわからないと言うしかない。
ca nós no lo sabemos si lo buscó o non,	みずから招いたことかどうか、わからないのだから。
diéronli enemigos salto a est varón,	敵対する者がこの男に飛びかかって、
ovieron a matarlo, Domne Dios lo perdón.	殺してしまった。主なる神よ、彼をゆるしたまえ。

[第4詩節]

Los omnes de la villa e los sus compañeros,	町の人々と男の同僚たちは、
esto cómo cuntiera com non eran certeros,	このことがどのように起きたか確かでなかったから、
defuera de la villa, entre unos riberos,	町の外にある土手のなかの
allá lo soterraron, non entre los dezmeros.	教会の信者の場所でないところに男を葬った。

[第5詩節]

Pesó-l a la Gloriosa con est enterramiento,	この埋葬は栄光の御方に悲しみをもたらした。
que yazié el su siervo fuera de su conviento ;	自分に仕えた者が修道院の外に眠っているのだから。
parezió-l a un clérigo de buen entendimiento,	聖母は道理をわきまえた聖職者のまにに現れ、
díssoli que fizieran en ello fallimiento.	このことで人々があやまちを犯したと告げた。

[第6詩節]

Bien avié treinta días que era soterrado,	男が葬られてちょうど三十日が過ぎた。これほど
en término tan luengo podié seer dañado.	時間がたっており「遺体は」損なわれただろう。
Díssol Sancta María: «Fiziestes desguissado,	聖マリアは言った。「あなた方はひどいことをした。
que yaz el mi notario de vós tan apartado.	私に仕えた者があなた方からこんなにも離れたまま眠っている。

[第7詩節]

Mándote que lo digas : que el mi cancellario	あなたが言うように命じる。私に仕えた者は神聖な
non merecié seer echado del sagrario ;	場から退けられるべき者ではなかった。三十日間
dilis que no lo dexe y otro trentanario ;	そこに捨て置くまににしないよう人々に告げなさい。
métanlo con los otros en el buen fossalario».	ほかの人とともにふさわしい墓地に納めるように」

[第8詩節]

Demandóli el clérigo, que yazié dormitado :	うとうと寝ていたその聖職者が聖母に尋ねた。
«¿Qué eres tú que fablas? Dime de ti mandado,	「話しているあなたは誰か。伝えたいことは何か。
ca, cuando lo dissiero, seráme demandado	そう言うのも、あなたが私に求めるからである。
quí es el querelloso o quí el soterrado».	訴えているのは誰か、葬られたのは誰なのか」

[第9詩節]

Díssoli la Gloriosa : «Yo só Sancta María,	栄光の御方は彼に言った。「私は聖マリア、
madre de Jesu Cristo, que mamó leche mía ;	私の乳を飲んだイエス・キリストの母である。
el que vós desechastes de vuestra compañía,	あなたたちのなかまから見捨てられたのは、
por cancellario mío yo a éssi tenía.	私に仕える者として大事にしていた者である。

[第10詩節]

El que vós soterrastes lueñe del cimiterio,	「教会の」墓地から遠く離れた所に葬った者であり、
al que vós non quisiestes fazer nul ministerio,	あなた方はその者の葬儀をおこなおうとしなかった。
yo por ésti te fago todo est reguncerio ;	その者のために行なわせることをすべて示そう。
si bien no lo recabdas, tente por en lazerio».	それを実行しなければ、あなたは悲嘆に暮れるだろう」

[第11詩節]

El dicho de la dueña fue luego recabado,	聖母の言ったことはすぐに実行に移され、
abrieron el sepulcro apriesa e privado,	ただちに急ぎ墓が開かれた。人々は奇跡を
vidieron un miráculon non simple ca doblado,	目にした。一つではなく二つの奇跡を。一つの奇跡も、
el uno e el otro fue luego bien notado.	もう一つの奇跡も、ただちに書き記された。

[第12詩節]

Issiéli por la boca una fermosa flor,	口から美しい花が咲き出していた。
de muy grand fermosura, de muy fresca color ;	すばらしく美しく、あざやかな色をしており、
inchié toda la plaza de sabrosa olor,	心地よい香りであらゆるところが満たされた。
que non sentién del cuerpo un punto de pudor.	遺体からは少しの臭いも感じられなかった。

[第13詩節]

Trobáronli la lengua tan fresca e tan sana	その舌は生き生きとして元気そうに見え、
cual pareze de dentro la fermosa mazana ;	口のなかはきれいなリンゴのようだった。
no lo tenié más fresca a la merediana,	昼ごろはあまり生き生きしていなかった。
cuando sedí fablando en media la quintana.	広間で〔無駄〕話をしていた時だったからか。

[第14詩節]

Vidieron que viniera esto por la Gloriosa,	栄光の御方のおかげでこうなったのを人々は目にした。
ca otri non podrié fazer tamaña cosa.	ほかの人ではこれほどのことはできないのだから。
Transladaron el cuerpo, cantando «Speciosa»,	人々は男の遺体を葬った。聖母を讃える歌を
aprés de la iglesia en tumba más preciosa.	歌いながら、教会の裏手のもっとよい墓に。

[第15詩節]

Todo omne del mundo fará grand cortesia	世の人々は誰もが処女マリアに仕える
qui fiziere servicio a la Virgo María ;	大いなる礼節を抱くであろう。
mientre que fuere vivo verá plazentería	生ある限りよろこびを見いだし、
e salvará el alma al postremero día.	最後の〔審判の〕日に魂を救うであろう。

この修道士は「知恵の足りない」«que era tiestherido» 男であり、しかも「俗世の悪癖をしばしばくりかえし」«ennos vicios seglares feramient embevido» たという。「悪い習慣に染まっていた」«que era en ál mal costumnado» ともいう。こともあろうに男は何者かに殺害された。そのため同僚たちは教会での葬儀を拒絶し、町外れの「信者の場所でないところに男を葬った」«lo soterraron, non entre los dezmeros» とある。「信者」と訳した«dezmeros» の語は教会に十分の一税«diezmos»を納める者のことである。教会納税者が信者と見なされ教会の墓地に葬られる⁽²⁵⁾。これは厳格に区別されていた。

『讃歌集』第56番と内容が類似するカンティーガがある。第24番は北フランスの古い町シャルトルが舞台である。冒頭に言う⁽²⁶⁾。

En Chartes ouv' un crerizon,	シャルトルに見習い修道士がおり、
------------------------------	------------------

que era tafir e ladrón,
mas na Virgen de corazón
avia esperanza

賭け事師で盗人だった男だが、
しかし聖母に心からの
信心を抱いていた。

ここに「見習い修道士」«crerizon» とあるのは、終生誓願を立てるまえの修練士のことである。盗人あがりのこの男はとうとう最後の告解をせずに亡くなった。罪の告白はおこなわなかったのである。後段に言う。

Porque tal morte foi morrer,
nono quisieron receber
no sagrad', e ouv' a jazer
fora, sen demorança.

そんな死に方で亡くなったので、
人々は聖なる場所に受け入れることを
望まずに「遺体を」横たえた。
すみやかにその外に。

ここに「聖なる場所」«sagrad'» とあるのは教会の墓地のことだろう。遺体はその「外に」«fora» に葬ったという。これは悪に染まって改心を遂げきれなかった男の話である。それでも聖母の信心だけはあったので、やがて恵みがもたらされたとある。

ベルセオの詩をアルフォンソ王の宮廷のトロバドルが参照したか否かは議論が分かれている⁽²⁷⁾。このカスティーリャ語の詩の典拠もさまざまに想定されたが、これだけの分量の詩に対応するものはない。第23番の罪にまみれた男の物語は、あるいはベルセオの詩と源泉が同じという可能性もある。第56番の方はゴージェ・ド・コワンシーにならって純朴な修道士像を造形したとも考えられよう。

スペイン文学史のなかではベルセオは教養派文芸 *mester de clerecía* の作者のひとりとされる。ラテン語を解する知識人の集団に属するが、大衆にもわかるような日常の言葉を用いて詩作した。聞き手をまえにして作品を朗詠するスタイルを取るものもある。ベルセオの『聖母の奇跡集』第22番は「救助された遭難者たち」«El naufrago salvado» と題された話で、冒頭に「みなさん、お望みとあらば日のあるうちにこうした奇跡についてさらにお聞かせしよう」«Señores, si quisiéssedes, mientras dura el día, d'estos tales miráculos aún más vos diría» と語りはじめる⁽²⁸⁾。ただしこの口上を額面どおりに受け取ることもできない。彼らの作品にはラテン語の素養を前提とした語彙（いわゆる教養語）がふんだんに用いられている⁽²⁹⁾。かえってトロバドルの語るアルフォンソ王のカンティーガの方がよほど人々の耳に入りやすかったのではないか。

6. イベリアの宗教的心性

第56番の物語を読むと、ある映画の一場面を思い出す。修道士が男の子に足し算を教えている。「2と2でいくつ?」「4」「4と4では?」「8」「8と8は?」「……20」「めっちゃくちゃだ!」«¿Dos y dos son? — cuatro; ¿cuatro y cuatro? — ocho; ¿ocho y ocho? …… veinte. ¡Que barbaridad!»

映画の原作はスペインの作家ホセ・マリア・サンチェス・シルバ José María Sánchez Silva が1953年に出版した『マルセリーノ、パンとぶどう酒』*Marcelino, pan y vino* である。これが1955年にスペインで映画化され、日本では『汚れなき悪戯』の名で知られた。物語は作者が幼いころ母から聞いた

話をもとにしているという⁽³⁰⁾。次のような内容である。

村のはずれに古い建物の跡地があった。修道士たちが借り受けて家を建てて暮らしていた。ある朝、門の外で泣き声がする。生まれてまもない赤ん坊が捨てられていた。どうしていいかわからず、役場にたずねたが誰も引き取り手はない。修道士たちは赤ん坊に洗礼をさずけ、みんなで育てることにした。聖マルセリーノの祝日に拾われたので、その聖者の名をつけた。子どもは丈夫に育っていった。修道士たちはマルセリーノをわが子のようにかわいがった。

マルセリーノはかしこい子で、庭仕事の手伝いもできるようになった。遊びざかりでいたずらもする。屋根裏部屋は危ないので行ってはいけないと言われていた。誰もいない隙に登ってみると、大きな十字架のキリスト像があった。はじめて見たときはこわかったが、ひとりぼっちでいるのがかわいそうだとも思った。やせほそった姿を見るたびに、マルセリーノの目に涙があふれてくる。パンをもってきて、「おなか、すいてる？」と聞くと、キリストの像はうなずいた。マルセリーノは尋ねた。「お母さん、いるの？」—キリストは答えた。「おまえのお母さんといっしょだよ」。

ある日、マルセリーノは祭のぶどう酒をコップに入れて屋根裏部屋へ運ぼうとした。ようすが変だと思った修道士たちがあとをつける。マルセリーノの目のまえでキリストが十字架から降りてきて、こう言った。「おまえはいい子だ。おまえが一番ほしいものをごほうびにあげよう」—マルセリーノは答えた。「ぼく、お母さんに会いたい。あなたのお母さんにも会いたい！」—キリストはマルセリーノをひざの上に抱きあげた。「おやすみ、マルセリーノ」……驚いた修道士たちが駆けよると、十字架のキリスト像の下でマルセリーノは眠るようにして亡くなっていた⁽³¹⁾。

『聖母マリア讃歌集』にはこの物語の遠いみなもとになったと思われる話がある⁽³²⁾。カンティーガ第353番は題辞に「どのようにして修道院長が修道院で育てていた男の子が聖母像の腕に抱かれた御子に食べ物をもたらしたか」*«Como un menino que criava un abade en sa castra tragia de comer ao menin[n]o que tiin[n]a a omagen enos seus braços»* とある。次のような内容である。

イタリアのある町に裕福な人がいた。子どもたちは次々と亡くなり、ひとり残った男の子を名のある修道院長に育ててもらうことにした。院長はわが子のように面倒を見た。ある日、その子は教会堂のなかで聖母と御子の像を見つけた。それは美しい像で、御子がその子に向かってほほえんだ。男の子は足しげくその像を見に行ったが、御子に食べものをあげる人が誰もいないことに気づいた。それから男の子は自分の食事を御子のもとに運ぶようになった。

そんなある日、御子がその子に語りかけた。「ここで食べるのはもうよして、明日ぼくのところで、お父さんといっしょに食事をしようよ」*«Contigo non comerei outra vez, se cras mig' e con meu Padre non quisieres yr jantar»* と。院長は男の子のようすが変わったのを見て聞いたすと、今までのことを残らず話した。それを聞いた院長は男の子といっしょに自分もそこに行きたいと心から願い、奇跡をもたらす聖母と御子を讃えた。そのうえで老院長は修道院のことをすべて後進の修道士たちに託した。この物語は次のように閉じられる⁽³³⁾。

Aquela noite passada, outro dia ant' a luz
o abad' e o menynno enfermaron, com' aduz
o feito desde miragre ; e à sesta, quand' en cruz

morreu por nos Jhesu-Christo, morreram eles a par.

その夜が過ぎ、次の日の朝日がさす前に、

院長と男の子は病の床についた。それはこの奇跡に

導かれてのことである。第六時に⁽³⁴⁾、キリストが私たちのために

十字架で死なれたその時刻に、ふたりはいっしょに亡くなった。

純朴で崇高なものを尊ぶイベリアの心性をここに見いだすことができるだろう。高貴な単純と言い換えてもよい。カトリック世界はそこに大きな価値を認め、文学や美術や音楽に刻みつけてきた。それはカンティーガの詩にも写本挿画にも表されていた。これこそが『聖母マリア讃歌集』の魅力のひとつではないか。

7. イベリアから西欧世界へ

聖母のカンティーガの個々の作品について、直接の典拠となった文献の検索はさかんにおこなわれてきた。ラテン語の聖母奇跡集成のうち候補となり得るものは数多いが、しかしそのなかから正確な典拠が発見された例はごくわずかしかない。物語の源泉を探るのであれば、これは西欧世界に豊富に存在する。とりわけ『聖母マリア讃歌集』成立の第一段階とされる第100番までのカンティーガの場合、その作業は十分に可能であろう。本稿で取りあげた2篇のカンティーガでもそれは明らかだった。

奇跡物語の源泉の所在はかならずしもイベリア内部にとどまらない。第100番までのカンティーガのうち、讃歌をのぞく奇跡物語は89篇ある。そのうちイベリアの外部に源泉を求めることのできるものは75篇におよぶという⁽³⁵⁾。場所が特定できないものもあるから数字はもとより目安にすぎないが、それにしてもアルフォンソ10世が最初に計画した集成においては、西欧世界との連続がきわめて顕著だったことがわかる。だがこの傾向は番号が進むにつれて変化していく。

『讃歌集』の編纂は次の段階で第200番まで増加するが、新たに加わった奇跡物語90篇のうちイベリアの外部に求められるものが46篇、内部に求められるものが44篇とほぼ拮抗する。つづく第201番以降の編纂段階では177篇のうち外部のもの55篇、内部のもの122篇となる。アルフォンソ王の生涯を語るカンティーガも後者に含まれるが、これも番号が進むごとに増加する。『讃歌集』の視野は徐々に内向きになっていくのである。

奇跡の物語がすくなくならず特定の聖所に結びつくことは前述した。これは上記の傾向と連動しており、イベリアの外の聖地にかかわるものは番号が進むごとに逆に減少し、アルフォンソ王の支配地であるカスティーリャ・レオン王国とその周辺を舞台とするものが圧倒的に多くなる。ピレネーの彼方で起きた奇跡が、イベリアの聖所の伝承に置き換えられていくことも後には起きた。このことは本稿次号の第3章で取りあげたい。

第100番までのカンティーガに話をもとせば、西欧世界からイベリアに流れこみ、世紀を越えて伝えられたものもある。たとえば第94番の修道院から逃げ出した修道女の物語をあげることができよう。これは127行にわたる長い作品で、題辞に「これはどのようにして聖マリアが、修道院から抜け出した修道女の代わりとなって〔彼女を〕救ったのか」« [E]sta é como Santa Maria serviu en logar da monja que sse foi do mōesteiro» とある。次のような内容である⁽³⁶⁾。

若く美しい修道女がいた。職務に精励し戒律を遵守する。宝物管理係 «tesoureria» に任じられた。これは聖具室係^{サクリスタン}のことで、そこにしまっている聖体の器は教会や修道院にとって資産であるから、その管理は重職だった。しかし彼女の精勤をこころよく思わない悪魔が誘惑の罠をしかけた。

修道女は騎士と恋に落ちる。大事な部屋の鍵を聖母の祭壇のまえに置いて、修道院から出ていった。ふたりは狂おしいまでに愛しあった。子どもも幾人か生まれたが、そのうち愛もさめてしまう。犯した罪に恐れおののき、修道院にもどってきた。ところが彼女の姿を見ても誰も驚かない。「なぜなら[処女マリアが]彼女の代わりとなって、なすべきことのすべてを引き受けていたのだから」«ca en seu logar entrou e deu a todo recado de quant' ouv' a recadar» とある。修道女は同僚たちに事実を語った。誰もがこの奇跡を讃え、語り継いでいったという。

この物語の起源は不明とされるが、最初に文献に現れるのはドイツのハイステルバッハの修道士カエサリウス Caesarius Heisterbachensis の『奇跡についての対話』*Dialogus miraculorum* である⁽³⁷⁾。カエサリウスはアルフォンソ10世の父フェルナンド3世に招かれ、1223年にブルゴスの修道院を訪れた。対話集の編纂はこれ以後のことと考えられている⁽³⁸⁾。ここには修道女ベアトリス sor Beatriz という名も記されており、これがずっと継承されていく。ついでゴーティエ・ド・コワンシーが翻案し、『聖母マリア讃歌集』に取りあげられた。

イベリアではこの物語の人気は衰えることなく語り伝えられた。1601年頃、ベレス・デ・ゲバラ Vélez de Guevara が聖体神秘劇『天上の女子修道院長』*La abadesa del Cielo* を著し、ついで1610年に黄金世紀を代表する演劇作家ロペ・デ・ベガ Lope de Vega が喜劇『よき管理係』*La buena guardade* を著した。1614年には贋作として名高いアベジャネーダ Avellaneda の『ドン・キホーテ第二の書』*Segundo tomo del ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha* にこの物語が挿入される。ラ・マンチャの男とは全然無関係な挿話であって、主人公はここでは女子修道院長である。貴族の青年に恋したあげく、あとに残していく修道女たちを聖母に託した。「至聖なるマリア様、あなたの天使のような純潔さで娘たちをお守りください」«Amparaldas, Virgen santísima, por vuestra angélica puridad» などと呑気なことを言って出奔してしまう⁽³⁹⁾。

近代になると西欧世界で物語が復活する。フランスのロマン派作家シャルル・ノディエ Charles Nodier が1837年に『修道女ベアトリスの物語』*Légende de sœur Béatrix* を散文でつづった。数奇な運命をたどった修道女はやがて静かに息を引き取り、教会はその輝かしい生涯を讃えて聖女に列したという⁽⁴⁰⁾。人々の敬虔さにはまったくもって畏れ入る。最後の輝きはメーテルリンク Maurice Maeterlinck の戯曲『修道女ベアトリス』*Sœur Béatrice* であろう。これは1901年にベルギーで刊行された⁽⁴¹⁾。

このように、13世紀以前にアルプスの北で語り出された物語がイベリアに伝わって聖母のカンティーガに歌われ、幾世紀も継承されたのち、ふたたび西ヨーロッパで脚光をあびたのである。『讃歌集』の最初期のカンティーガはイベリアと地続きの国々につながるものがすくなくなかった。それがなぜ足もとばかり見つめるようになっていくのか。この問題は次号で聖地のカンティーガを読み解きながら考えてみたい。

注

- (1) Sanctus Gregorius magnus, “Dialogorum liber IV de vita et miraculis patrum Italicorum”, *Patrologia latina*, LXXVII, apud Garnier fratres, Paris, 1896, col.149-430 ; Adalbert de Vogüé (éd.), *Grégoire le Grand, Dialogues*, 3vol., Sources chrétiennes, Les Éditions du Cerf, Paris, 1980.
- (2) Anselmus Cantuariensis, “Tractatus de conceptione beatae Mariae virginis”, *Patrologia latina*, CLIX, 1853, col.301-318. 同書はかつてアンセルムスの著作とされていた。以下の訳がある。Boniface del Marmol (tr.) , *La première apologie du dogme de l’Immaculée Conception. La Conception Immaculée de la Vierge Marie (De conceptione sanctae Mariae) par Eadmer moine de Cantorbéry (1124)*, Abbaye de Maredsous, Desclée de Brouwer, Lille / P. Lethielleux, Paris, 1923 ; 矢内義顕訳「聖母マリアの御やどりについて」中世思想原典集成10『修道院神学』平凡社、1997年、pp.74-98. これも本稿第5章で扱いたい。
- (3) Jean-Louis Benoit, *Le Gracial d’Adgar. Miracle de la Vierge, Dulce chose est de Deu cunter*, Brepols, Turnhout, 2012, p.19.
- (4) Albert Poncelet, “Miraculorum beatae virginis Mariae quae saec. VI-XV latine conscripta sunt”, *Analecta Bollandiana*, XXI, Bruxelles, 1902, pp.241-360.
- (5) これもラテン語の聖母奇跡集成に先例がある。南フランス最大の聖地のひとつロカマドゥールでは、1172年に『ロカマドゥール聖マリア奇跡集』*Miraculorum sancte Marie Rupis Amatoris* が書かれている。Edmond Albe (ed.) , *Les miracles de Notre-Dame de Rocamadour au XII^e siècle*, rééd. par Jean Rocacher, Éditeur le Pérégrinateur, Toulouse, 1996.
- (6) cantiga 79 : ms.To.42, fol.57ro-58ro ; ms.T.79, fol.116ro-vo, pl. fol.117ro ; ms.E.79, fol.95vo-96ro ; El marqués de Valmar (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, I, Real Academia Española, Madrid, 1889, pp.128sq. ; Walter Mettmann (ed.), *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, I, Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1959, pp.233sq. ; id., *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, I, Editorial Castalia, Madrid, 1986, pp.256sq. ; Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, I, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, pp.227sq.
- (7) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1972, IV, p.153 ; José Filgueira Valverde, *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María : códice rico de El Escorial, ms. escurialense T.I.1*, Editorial Castalia, Madrid, 1985, p.144 ; Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, I, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, p.227.
- (8) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, p.107 ; ed. 1986, I, p.150.
- (9) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, p.269 ; ed. 1986, I, p.289.
- (10) Gonzalo Menéndez Pidal, “Los manuscritos de las Cantigas. Cómo se elaboró la miniatura alfonsí”, *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CL, Madrid, 1962, p.40 ; id., *La España del siglo XIII leída en imágenes*, Real Academia de la Historia, Madrid, 1986, p.29.
- (11) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1986, I, p.23.
- (12)『聖母マリア讃歌集』の編纂および写本制作にアルフォンソ10世がどのように関わってきたかは重要な問題であり、本稿第4章で改めて検討する予定である。ここでは問題の出発点のひとつとなった次の論考をあげるにとどめた。Antonio García Solalinde, “Intervención de Alfonso X en la redacción de sus obras”, *Revista de filología española*, II, Centro de Estudios históricos, Madrid, 1915, pp.283-288.
- (13) 次の写本複製本をもとに記述をおこなう。*Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María, edición facsímil del Códice T.I.1 de la Biblioteca de San Lorenzo el Real de El Escorial, siglo XIII*, Edilán, Madrid, 1979.
- (14) Sanctus Gregorius magnus, *Dialogorum liber IV*, cap. XVII, “De transitu Musae puellae”, *Patrologia latina, op. cit.*, LXXVII, col.348-349 ; Vogüé, *op. cit.*, pp.70-72.

- (15) *Patr. lat.*, LXXVII, col.349 ; Vogüé, *op. cit.*, p.72.
- (16) 聖書の引用はラテン語訳ヴルガータから訳した。聖書の日本語訳はヘブライ語やギリシア語原典からの訳が一般的だが、カトリック教会では現在に至るまで公認の聖書はヴルガータであり、教理の典拠としても典礼の場でもこれが用いられる。本稿における聖書の引用が通行のものと異なるところがあるのはそのためである。Robertus Weber (ed.), *Biblia sacra iuxta Vulgatam versionem*, II, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 3.Auf., 1985, p.1643.
- (17) Pierre Kunstmann (éd.) , *Adgar, Le Gracial*, Université d'Ottawa, Ottawa, 1982, pp.159-160 ; Benoit, *op. cit.*, pp.322-325.
- (18) Benoit, *op. cit.*, p.325, n.7 ; p.335, n.7.
- (19) Kunstmann, *op. cit.*, pp.149sq. ; Benoit, *op. cit.*, pp.332-333.
- (20) cantiga 56 : ms.To.71, fol.92ro-93ro ; ms.T.56, fol.82vo, pl. fol.83ro ; ms.E.56, fol.76ro-77ro ; Valmar, *op. cit.*, I, pp.82sq. ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, pp.160sq. ; ed. 1986, I, pp.193sq. ; Laura Fernández et al. *op. cit.*, pp.167-169.
- (21) *Vulgata*, *op. cit.*, p.807, 920, 930, 932.
- (22) L'abbé Poquet (éd.), *Gautier de Coincy, Les miracles de la Sainte Vierge*, Parmentier et Didron, Paris, 1857, col.359-362 ; Vernon Frederic Koenig (éd.), *Gautier de Coincy, Les miracles de Nostre Dame*, II, Textes littéraires français, XCV, Droz, Genève, 1961, pp.224sq.
- (23) Bibliothèque Nationale de Paris, nouvelle acquisition française, no.24541, fol.55vo ; <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000451c/f3>
- (24) Fernando Baños (ed.) , *Gonzalo de Berceo, Milagros de Nuestra Señora*, Biblioteca Clásica de la Real Academia Española, III, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 2011, pp.28-31. 以下の邦訳がある。ゴンサロ・デ・ベルセオ作、太田強正訳「聖母の奇跡Ⅰ」神奈川大学人文学会『人文研究』183号, 2014, pp.120-123. 本文中の試訳は邦訳を参照しつつ原文から訳した。
- (25) José Luis Martín Rodríguez, “Los milagros de la Virgen : versión latina y romance”, *Espacio, Tiempo y Forma*, serie III, Historia medieval, XVI, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid, 2003, p.181.
- (26) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, p.68 ; ed. 1986, I, p.115.
- (27) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1986, I, p.10.
- (28) Baños, *op. cit.*, p.132.
- (29) Rafael Lapesa, *Historia de la lengua española*, Gredos, Madrid, 9ª ed. 1981 ; ラファエル・ラペサ著、山田善郎監修、中岡省治、三好準之助訳『スペイン語の歴史』昭和堂、2004年、p.223 ; p.240, n.36.
- (30) 江崎桂子訳『汚れなき悪戯』小学館、1980年、p.4.
- (31) 最後の箇所のみ引用を示したい。José María Sánchez Silva, *Marcelino, pan y vino*, Espasa-Calpe, Madrid, 1991, p.101 : «¿Qué quieres entonces? — le pregunta el Señor. Y entonces Marcelino, como si estuviera ausente, pero fijando sus ojos en los del Señor, dijo : — Sólo quiero ver a mi madre y también a la Tuya después. — El Señor lo atrajo entonces hacia Sí y lo sentó sobre sus rodillas, desnudas y duras. Después, le puso una mano sobre los ojos y le dijo suavemente : — Duerme, pues, Marcelino»
- (32) このことは濱田滋郎氏も指摘している。『スペイン音楽のたのしみ』音楽之友社、新版、2013年、p.46.
- (33) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.256 ; ed. 1989, III, p.217.
- (34) キリストの十字架上の死が「第六時」«à sesta» ならば昼の十二時になろう。福音書のラテン語訳ヴルガータは「第九時」もしくは「第九時ごろ」とする (Matthaeus, XXVII, 46 : «circa horam nonam» ; Marcus, XV, 33 : «in haram nonam» ; Lucas, XXIII, 44 : «in nonam haram», *Vulgata*, *op. cit.*, II, p.1572, 1603, 1655)。邦訳聖書はいずれも「[午後] 三時ごろ」とする。
- (35) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1986, I, p.12.

- (36) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, pp.268-271 ; ed. 1986, I, pp.288-291.
- (37) Nikolaus Nösges und Horst Schneider (Hrsg.), *Carsarius von Heisterbach, Dialogus miraculorum, Dialog über die Wunder*, III, Brepols, Turnhout, 2009, S.231, VII, 34 : «In monasterio quodam sancimonialium, cuius nomen ignoro, ante non multos annos virgo quaedam degebat nomine Bratrix»
- (38) Valverde, *op. cit.*, p.liii, 166.
- (39) Alonso Fernández de Avellaneda, *Segundo tomo del ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, Felipe Roberto, Tarragona, 1614, capítulo XVII, «En que el ermitaño da principio a su cuento de los felices amantes» ; ed. Luis Gómez Canseco, Real Academia Española, Madrid, 2014, p.157 ; 以下の邦訳がある。岩根関和訳『贋作ドン・キホーテ』筑摩書房、1999年。
- (40) Charles Nodier, *Légende de sœur Béatrix*, Maurice Glomeau, Paris, 1924, p.56 : «Béatrix mourut cependant, ou plutôt elle s'endormit avec calme dans ce sommeil passager du tombeau qui sépare le temps de l'éternité. L'Église honora sa mémoire d'un souvenir glorieux. Elle la plaça au rang des saints.»
- (41) Maurice Maeterlinck, "Sœur Béatrice, miracle en trois actes", *Théâtre*, III, P. Lacomblez, Bruxelles /Per Lamm, Paris, 1901, pp.177-225 ; 鷺尾浩訳「ベアトリースニ」『マーテルリンク全集』第4巻、冬夏社、1920年、pp.1-54.

付記

筆者は2019年度東洋大学ライフデザイン学部出版助成により『聖母マリアのカンティーガ — 中世イベリアの信仰と芸術』と題した書籍をサンパウロ（カトリック聖パウロ会）から刊行した。これは『聖母マリア讃歌集』からいくつかのカンティーガを選んで読み解き、中世イベリアの信仰と芸術の諸相を紹介した一般書である。本稿の記述と重なるところもあるが、本稿は考察対象とした個々の作品について原文を掲載し、文献書誌に関する注記を附して学術論文としてまとめたものである。

Las cantigas de Santa María, II,
Pueblos medievales rogando milagros

KIKUCHI Noritaka

resumen

El rey Alfonso X de Castilla y León constituye un conjunto de canciones por alabanza a Nuestra Señora, llamado las *Cantigas de Santa María*. Se trata de una colección de cuatrocientas veinte composiciones escritas en gallegoportugués, lengua literaria adecuada para este tipo de poesía lírica de trovador medieval. Hay unos códices conservados procedente de la propio escritorio del monarca, anotados en notación mensural, un sistema musical precisa para la época. Además, se aparece rodeado en algunas de las ilustraciones de los manuscritos ricos de las cantigas. Todos estos son legados valiosos de la fe y de las artes ibéricas del siglo XIII. En la corte alfonsí que se reunieron poetas, compositores y intérpretes de distintas culturas contiendo cristianos, musulmanos y judíos, formaron parte de la agrupación amante de la ciencia y las varias artes.

Leyendo algunas cantigas escogidas para esto estudio, investigaremos las cinco asuntos siguientes : en el primero capítulo, aclarar un propósito principal de las cantigas, respecto al problema sobre el origen de la lírica europea ; en el segundo capítulo, tratarse las canciones que cuentan milagros sucedidos con la intervención de Santa María, haciendo una comparación con las obras coetáneas de la lengua vulgar ; en el tercero capítulo, tener como objetivo los versos y las miniaturas del códice en relación con algunos lugares sagrados de la Nuestra Señora y sus romeros de entonces ; en el cuarto capítulo, seguir la vida del rey llena de altibajos a través de composiciones autobiográficas ; en el quinto capítulo, remonstrarse desde el ángulo de la teología católica la fuente del culto popular sobre la Inmaculada Concepción de la Virgen, creído después con entusiasmo en las tierras española y portuguesa.

palabras clave : santa María, cantiga, gallegoportugués, música y artes ibéricas medievales, teología católica